

## 戦前の弾圧で命落とした伊藤千代子

## 不屈の姿 若い世代へ

戦前の治安維持法で弾圧され、24歳で命を奪われた日本共産党員の伊藤千代子の「獄中最後の手紙を見る会」が24日、北海道苫小牧市立中央図書館で開かれました。道内外からの参加者は、千代子不屈の生き方に思いをはせ、語り合いました。

伊藤千代子は獄中での拷問や虐待にも屈せずたたかいました。歌人の土屋文明が「こころさしつたふれし少女(おとめ)よ 新しき光の中に置きておもはむ」と詠み、非業の死を悼みました。

最後の手紙は義母や義妹宛ての4通。夫だった文芸評論家の浅野晃氏が中央図書館に寄贈していたものを、苫小牧市議だった島山恵弘氏らの働きかけで2005年4月に公開されました。獄中から義理の妹には、「命あるものはみんなあらん限り生きようとしている」と前を向き、義母には「今年は暑いから」と気づかう優しさを持ち合わせていたことがわかります。

## 北海道苫小牧「獄中最後の手紙を見る会」



伊藤千代子の生き方に思いをはせ、語り合う参加者＝24日、北海道苫小牧市

千代子の生き方を描く映画「伊藤千代子の生涯」(仮)＝22年上映予定の桂壮三郎総

監督は、菅政権による学術会議会員の任命拒否問題をあげ、「この作品の意義があらためて出てきた」と戦前のような時代に戻してはならないと訴えました。

手紙発見の意義について同映画「製作を支援する会」事務局の藤田廣登氏、上映実行委員会の入谷寿一委員長が発言。藤田氏は、千代子が最愛の夫の裏切りにもかかわらず、獄中で「自分が立ち上がっていく」というメッセージを残したことが重要だと述べました。

治安維持法犠牲者国賠同盟苫小牧支部長の島山氏は、コロナ禍の困難な中で映画製作への支援が大きく広がっていると紹介。同図書館の岩城昌幸館長があいさつしました。参加者は「千代子は厳しい時代に活動を買いた」「若い世代にその姿を伝えたい」と交流しました。